詩編25－34編の構成と主題

飯　　謙

Summary

On the Redaction and the Theme of Pss. 25–34

Ken Ii

In this paper I have investigated some hypotheses about the arrangement of Pss.25–34.F.-L. Hossfeld and E.Zenger have showed that Pss.25–34 construct the chiasmus as follows ; a. Ps.25, b. Pss.26–28, c. Ps.29, b′. Pss.30–32, a′. Ps.34. They have regarded Ps.33 as a special position set by final redactors in the Hellenistic era. Th.Lescow and N.Lofink have considered that there are close continuity between Ps.24 and Ps.25.M.Millard has made a suggestion of a wider compositional arc (*Kompositionsbogen*) of Pss.12–31,based on the criticism of the macro form that he has assumed.

Though they have pointed out words and motifs that have occurred repeatedly in the text, they have not observed the cohesion among the psalms in the current arrangement of the Psalter. From this point of view I have examined following three points ;

a. how do the redactors express the Temple that is the main theme of the preceding psalms group, Pss.15–24?

b. how do they describe the "sinner" in the context of the psalms group, Pss.25–34?

c. how do they treat the doctrine of retribution or the act-consequence relationship?

In conclusion I have suggested that the redactors have tried to show the spiritual position that become free from the Temple-institution, that they have spoken as one of sinner, and that they have reached the horizons of belief that is beyond the doctrine of retribution or the act-consequence relationship.

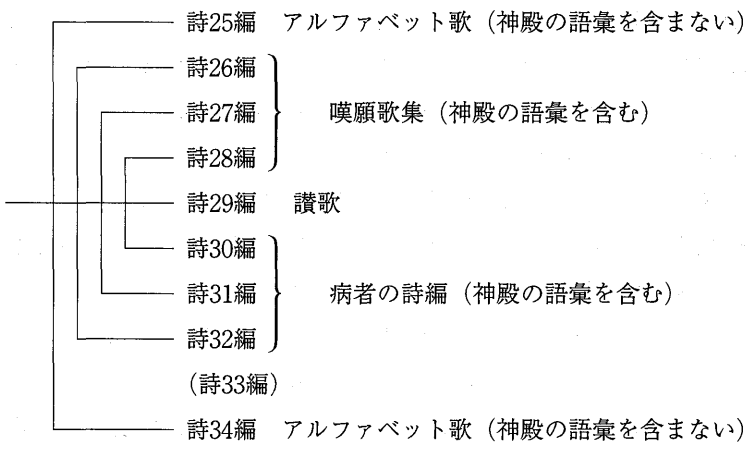
0. はじめに

旧約詩編が、第二神殿で用いられた詩歌の、アット・ランダムな蒐集体ではなく、各作品を意図的に配列した編集体であるということは、いまや定着した認識となっている[1)]。配列を考慮する詩編研究を提唱したF.-L.HossfeldとE.Zengerは、第一ダビデ詩編が詩編3-14編、15-24編、25-34編、35-41編の各小集合（Kleingruppe）よりなると主張した[2)]。われわれはそれらの小集合についてすでにいくつかの研究を公にしてきた[3)]。本稿ではそれらのうち、詩編25-34編の統一性について考察する。

それらの小集合が、彼らの考えるように厳然と区切られるものかどうか、疑義をはさむ向きもある。たとえば、いわば境界に位置する「アルファベット歌」である詩編25編を、前後の小集合にまたがる「架け橋」的な作品と性格づける研究や、まったく異なる小詩集を設定する理解も提出されている。とはいえ、これらの提案も、旧約詩編が単なる蒐集体ではない編集体であるとする仮説を、いささかも否定するものではない。むしろ逆に、これが熟慮の上で形成された作品だということを論証していると言える。本稿では、まずこれらの議論を整理した上で当該テクストのメッセージを検討し、さらには第一ダビデ詩編および旧約詩編の編纂過程と思想とを探求する手がかりを得たい。

1. F.-L. HossfeldとE.Zengerの見解[4)]

HossfeldとZengerは、詩編25-34編について以下のようなキアスムス構造を指摘した。彼らは、図示した構造が暗示するように、詩編33編が編集の最終段階においてこの統一体に挿入された作品であると考えた。



すでに示してきたように、HossfeldとZengerは第一ダビデ詩編の編集段階を、1）捕囚前、2）捕囚期、3）捕囚後、4）ヘレニズム期の四つに区分した。HossfeldとZengerによる詩

編の編集史に関する認識は次のようなものである。1）担い手の判然としない捕囚以前の素朴な祈りを綴った作品が、2）捕囚期にいろいろな立場から改訂され、小詩集にまとめられる。Hossfeld と Zenger が見るところ、この時期に、「貧者の神学」(Armen-Theologie) を担った人々の集団意識が形成された。3）捕囚後、「貧者の神学」の担い手が全体的な補筆をし、「貧しき者」を真のイスラエルと性格づける。そして、4）ヘレニズム時代に入り、その「貧しき者」をイスラエル全体に拡張する編集がなされ、この詩編集が成立を見たのである[5]。この観点から Hossfeld と Zenger は、詩編25-34編の編集史を、次のように想定した。

1）捕囚前：詩26, 27：1-6，7-13, 28：1-7，30：1-6，31：10-19, 32：1-5，7-8，11
2）捕囚期：詩27：14, 28：8，29：3a, 30：7-13, 31：2-9，20-25, 32：6，9-10
3）捕囚後：詩25, 28：9，詩34
4）ヘレニズム期：詩33

1.1. 捕囚前の編集 Hossfeld と Zenger が見るところ、捕囚前に創作されていた各詩編の基層は、まず捕囚時代、編集者の補筆による改訂を受けて小詩集にまとめられた[6]。さらに捕囚からの解放以降、その小詩集はさらなる編集の手を経て現在の形態に整えられた。彼らがまず注目するのは、詩編26-28編と30-32編とがそれぞれテーマを共有する小詩集を構成していることである。

われわれが彼らの見解にしたがって観察するところ、詩編26-28編には敵対者から訴えられ、生命の危機に瀕した人々の嘆願が綴られている。詩編26編は、自らの潔白を訴える義人の嘆願である。この人は「空しい人々」(*mtj-šw'*)や「狡猾な者たち」(*n'lmjm*)、「邪な者たち」(*mr'jm*) の教唆により共同正犯に認定されかけているということなのであろうか、処刑判決の瀬戸際に立たされている（9節)。詩編27編は二部よりなるが、前半は敵対者によって苦しめられる人（1-6節)、後半は偽証者に陥れられた無実の人（7-13節）の嘆願である。詩人は前半では恐怖を覚える対象が存在することを暗示し（1-3節)、後半ではヤハウェの恵みを「生ける者たちの地で」見るよう願っている（13節)。このテクストは、詩人の生命が緊急事態に直面していることをほのめかしていると言える。また詩編28編は、詩編26編と同じく、仲間であった人物の口車に乗って罪を犯した人の嘆願である。詩人は「穴に下る」事態に直面し（1節）、自身への疑いが冤罪であって、仲間たちこそが罰せられるべきであることを主張している。そうしてこの作品の終結部で、詩人は祈りが聞かれたことを述べ、感謝を口にし、自身だけの救いから、民全体の救いへと心が開かれてゆく（6-9節)。読者はここにいたって初めて、26編から続いた嘆願が神に聞かれ、困難な状況が動いたという報告を聞くのである。このように、詩編26-28編からは、一つの小詩集としてのまとまりを読みとることができる。

一方、詩編30編から32編では病者の嘆きと感謝が共通している。Hossfeld と Zenger は、詩編30編が29編とは異なり、病のテーマによって始まることを指摘する。詩編30編には「癒す」(*rp'*＝3節）という疾病に関わる語彙と、死を暗示する言表が見られる（4，10節）。読者は、詩人が死に至る病におかされていると想像する。しかし終結部では、詩人は病を癒され、ヤハ

ウェに感謝を献げる（12–13節）。31編にも苦悩によって肉体に変調を来して病を得、友人からも忌避された詩人の悲しみが認められている（10–14節）。詩人は、詩編26–28編の作者と同じく、自身の苦悩が敵対者の陰謀によることを訴えつつ（14節）、他方では、自身の罪を告白する（11節）。だが30編と同様に、ヤハウェによって病を克服したことを繰り返し述べ、作品を締めくくる（8－9，20–23節）。さらに32編でも詩人は罪による病を訴えるが（3－5節）、ヤハウェの赦しによってその窮状を乗り越え、最後は祭司的託宣をもって作品を閉じる。

1.2. 捕囚期の編集 Hossfeld と Zenger は、上記した二つの小詩集がそれぞれ語彙、表現、形態のレベルでキアスムスの関係で対応していることを指摘する。彼らはその理由として、双方が連作として組み合わされ、より大きな詩集とされたことを想定する。それは捕囚期に、詩編29編を軸とする編集作業によって生まれた。以下にその主な対応点を列挙する。

1）詩編28編と30編　両作品は、死に脅かされた中で、それを克服するという状況が重なる。詩人は、「穴に下る者たち」（*jwrdj bwr*）の道連れとなる危難に直面していた（28：1，30：4）。その場面で詩人はヤハウェに呼びかけ（*'ljk Jhwh 'qr'*＝28：1，30：9）、また叫んだ（*šw' 'ljk*＝28：2，30：3）。ヤハウェはそれを聞き（*šm'*＝28：2，6，30：11）、詩人の助けとなった（*'zr*＝28：7，30：11）。

2）詩編27編と31編　終結部で、ヤハウェに望みを抱く者（たち）に対する励ましが語られている（*hzq*，*'mṣ*＝27：14，31：25）。Hossfeld と Zenger は、これが実にまれな形態であり、捕囚後期の編集に由来すると述べる。さらに彼らは「砦」（*m'wz*＝27：1，31：3，5）や「大岩」（*ṣwr*＝27：5，31：3）といった語彙に、「王の祈り」の特徴を見る。特に顕著な点は、ヤハウェが詩人を神殿に、すなわち隠れ場（*str*）もしくは仮庵（*skh*）にかくまい（*str*）、救済するという、やはりまれな記述である（27：5，31：20–21）。

3）詩編26編と32編　Hossfeld と Zenger は、キアスムスの外枠を構成する二つの詩編における対応関係は他の二例と比べると少ないと断りつつ、人生の歩みのモティーフ（26：1，3，11，32：8）と罪に関わる語彙（*ḥt'*＝26：9，32：1，5）をあげる。しかしながら詩編26編と32編のテーマは、全く対照的である。すなわち、32編では作者自身の罪に言及しているのに対して、26編では無実の義人が非難の対象である敵対者のそれを抉剔している。神殿も、詩編26編では詩人の行動の正当性を証明する場であるが、32編では赦しと神による導きを与える場と解されている。われわれの考えるところ、これは単なる対応項目としてではなく、「移行」という側面から考察されるべきであろう。

この神殿理解の問題はいま少し、掘り下げる必要がある。詩編26–28編と30–32編の二詩集は、神殿の語彙を多数含んでいる。そして双方の詩集をつなぐ位置にある詩編29編も、明らかに神殿を生の座とする作品である。Hossfeld と Zenger は、捕囚期の編集者が、捕囚時代後期に詩編29編を中央に置いて両詩集に架橋し、エルサレムや神殿を強調したより大きな編集体（詩26–32編）を完成させたとする。そのために、捕囚期の編集者は作品中に以下に示すような、いくつかの補筆を行った。

1）28編8節「油注がれた者」は、エルサレムを生の座とする「王の詩編」(18：51，20：7）を下敷きにしている。また「砦」(*m'wz*）はエルサレムをイメージさせる語である。

2）29編3節a「栄光のエールは（雷鳴を）轟かせる」も、やはりエルサレムを生の座とする「王の詩編」からの引用である（18：14)。

3）30編8節「砦」は、作品をエルサレムに関係づける。また13節aの主語である「栄光」（*kbwd*）は、29編9節の神殿に集った会衆による讃美の声をエコーしている。

4）31編の基層（10–19節）は嘆願の祈りであるが、補筆（2－9，20–25節）によって感謝の歌に改訂される。そのうちの3－4節には「砦」(*m'wz*)、「大岩」(*ṣwr*)、「岩」(*mṣwr*）などエルサレムを暗示する語が用いられている。

Hossfeld と Zenger は、詩編26–32編が捕囚期に編纂された当時、詩編24編に後続作品として直接、結びつけられていたと考えた。それは、詩編24編と26編とが非常に強く結びついているため、詩編25編がその関係を引き裂いているとの印象を受けたからである。詩編24編は神殿への入城を許可された巡礼者とヤハウェとの出会いを語っているが、彼らは詩編26–32編がその出会いを具体化していると見る。編集者は範例的な叙述法を改訂し、編集体をエルサレムに関係づけていったことになる。

1.3. 捕囚期以後の編集　捕囚期に形成された詩編26–32編の編集体は、捕囚後に「貧者の神学」を内包する詩編25編と34編とによって枠づけられた。これら二つの作品が、形態的にも内容的にも重なりをもつことはよく知られている。

1）双方ともアルファベット詩編で、w行が欠落（25編はq行も欠落し、r行が重複)。

2）最終行が過多状態にあり、p行が定位置のほか最終行でも用いられる。

3）双方とも、捕囚後の「貧者の詩編」の特徴を示す（25：9，16，18，34：3，7)。

4）行為・帰趨関連図式が役割を果たしている（25：13，34：11，13，15)。

両者の大きな違いは類型であり、詩編25編は嘆きの歌だが、対して34編は感謝の歌である。Hossfeld と Zenger は、その理由として、詩編34編が当初は罪を赦された喜びを歌う詩編32編に続く位置にあったことを想定する。たとえば34編19節「ヤハウェは砕かれた心に近い／粉々にされた霊を、彼はお救いになる」は、32編5節に書かれた罪告白によってヤハウェによる救いを実感したという言葉をエコーしていると言える。そして32編7節と34編8節における *sbjb* の用法（神が詩人を取り囲む）も共通している。彼らは、これらの素材が詩編32編と34編とが連続する位置にあったことの傍証であり、詩編34編は32編の後続作品として、また詩編25編に対応する作品として、ふさわしく整えられていると言う。

詩編25編についても若干の検討を加えておこう。Hossfeld と Zenger は、後述する N.Lohfink を参照し[7]、詩編24編と26編が語彙レベルで深い関わりをもつこととともに、詩編25編も両作品と関連をもつことを指摘する。彼らは同時に、25編が他の詩編に見られるエルサレム神殿との関わりやヤハウェの王性もしくは王の祈りのモティーフを有していないので編集批判の観点から記述されるべき新しい質を展開していると見る。それゆえ、彼らは詩編25編が前後の作品

と類縁性を保ちつつも、別の機会に編集、配置された作品であると解する。

では、詩編25編と34編がそれぞれの位置に挿入されたのは何故か。Hossfeld と Zenger は、捕囚後の「貧者の編集」をあげる。彼らによれば、それは単に枠を造るのみならず、先行する詩編集合（詩3-14，15-24編）においてもそうであったように、その統一体がもつイスラエルの展望を提示するためであった。彼らはそれぞれの最終節である25編22節と34編23節とに注意を促す。前者は異邦人が引き起こした内的・外的苦悩からのイスラエルの解放を、後者は「ヤハウェの僕」の解放を語っている。そして二つの作品は、詩編26-32編において個々の状況に結びつけられた祈りが、貧者の生活構想によって枠づけられるという意味で解釈を行った。さらにこの編集は、「ヤハウェを畏れる者」(25：12，14，34：8，10，12）や「ヤハウェに逃れる者」(*ḥsh*＝25：20，34：9）などの名称を用いて「貧者」の概念を拡張し、諸民族による迫害の下でヤハウェの助けに信頼して生きるイスラエル人を含めていった。Hossfeld と Zenger は、この編集の地平において省察的な「貧者の神学」が生まれたとする。その生の座は、自身をあらゆる苦難の経験にもかかわらずヤハウェに愛された神の民の具体化と捉える捕囚後のシナゴーグ共同体にあると考える。

さて、Hossfeld と Zenger は、詩編25-34編を統一的編集体と見るものの、詩編33編はその枠から外れて編集段階の最後、すなわちヘレニズム時代に挿入された作品であるとする。これは第一ダビデ詩編で唯一の無表題作品であるが、彼らはそれが「貧者の詩編」の新しい注解としてヤハウェの王国を語るために、この詩編集合の中心主題として配置されたと見たのである。彼らの見解にしたがうと、この作品冒頭の詩行は、先行・後続詩編の言葉をエコーしている。

32：11　喜べ、ヤハウェによって（*bJhwh*）、歓喜せよ、義人（*ṣdjq*）たちよ。
　　頌えよ（*zmr*）、心の真っ直ぐな者（*jšr*）たちすべてよ。

33：1　頌えよ（*zmr*）、義人（*ṣdjq*）たちよ、ヤハウェによって（*bJhwh*）、
　真っ直ぐな者（*jšr*）たちに、讃美（*thlh*）は、似つかわしい。

34：2　わたしは祝そう、ヤハウェを、すべての時に、
　いつも、彼の讃美（*thlh*）が、わたしの口に。

詩編33編1節の単語の半数以上は32編11節に見られ、また一部は34編2節にも確認できる。その他にも、詩編33編が32編と34編とを意識した痕跡が確認される。32編8節はヤハウェから詩人への個人的な助言が記されているが、33編10節以下ではそれは世界史のレベルに押し広げられている。またヤハウェの眼差しは双方の作品に取り上げられており（32：8，10，33：18，22)、この讃美を歌う者たちは、心から喜びの声を上げる（32：11，33：21)。これらのモティーフは、詩編34編にも確認できる。すなわちそれは祝福の詞（33：12，34：9)、ヤハウェの配慮ある眼差し（33：18，34：16)、讃美の集団の称号である「義人」(33：1，34：16，20)

や「神を畏れる者」(33：18，34：10，12）である。Hossfeld と Zenger は、これらを詩編33編が32編と34編との間にはめ込まれた証左と考えたのである。Hossfeld と Zenger は33編19節と34編11，22節の関係に注意を促す。すなわち、後者は悪しき者が飢え（*r'b*)、死ぬ（*mwt*）と述べているのに対し、前者はヤハウェを畏れ、その慈しみを待ち望む者を死（*mwt*）と飢え（*r'b*）から救うと語る。そこで Hossfeld と Zenger は、34編のテクストが33編の前提となっていると解した。しかしながら、これらは詩編33編が前後の作品と関連をもつことを語る材料にはなるが、後に挿入されたという根拠とはならない。また彼らは、詩編33編が古い貧者の詩編や王の祈りの慣用表現を借用して、詩編90番台の「王なるヤハウェ讃歌」や旧約詩編を締めくくるハレルヤ（詩146-150編）に並行する作品となっているため、より後代に年代設定したのである。そして詩編33編によって貧者の神学は、ヤハウェの王性を確認し、ヤハウェが創造者、歴史の導き手、人間を掌握する者として世界に対してもつ意味を際立たせていったという。しかしこれもまた、この小集合の編集時期を語る材料であるとしても、33編が後に組み込まれたという根拠とはならない。このように彼らの見解にはいくつかの疑問が残る。そこでわれわれは、Hossfeld と Zenger 以外の提案に目を向け、彼らの見解を検証する手がかりを得たい。

2．小集合の区分に関する諸提案

Hossfeld と Zenger は詩編25-34編を小集合と考えたが、その認識は妥当と言えるであろうか。最初にわれわれは小集合の区分について、より具体的には、詩編24編と25編が個別の小集合に属するものとして区切られうるのかという問題を確認しておきたい。無論われわれの考えるところ、詩編１-41編が連作なのであり、したがってこれら二つの作品が関連性をもつことは、大前提である。ただそれが、散文的に言えば、同一の段落に属するか否かという問題を整理しておく必要があると考える。

2.1.　詩編24-26編の結束性　このテーマを詳細に取り上げたのが Th.Lescow である[8)]。彼は、詩編24-26編が独立した朗読用の統一体(Leseeinheit)であるとする見解を発表した。Lescow は独自に考案した「段階図式」(Stufenschema)[9)]の観点から詩編25編を分析し、同じ図式を24編と26編とが共有し、かつ双方が対応関係にあることを示した。そして彼は詩編24-26編に「魂」(*npš*）を鍵語とする集中構造を指摘した。

24：4ｂ　その魂を空しいものに上げない
25：1ｂ　わたしの魂を、あなた（ヤハウェ）に、上げる。
25：13a　彼の魂は、恵みの中で、夜を過ごす。
25：20a　守ってください、わたしの魂を
26：9ａ　あなたが集めませんように、わたしの魂を、罪人とともに。

Lescow の考えは、ダビデ詩編あるいは旧約詩編を、それほど大規模にはならない小詩集の

集合として方向づけたと言える。彼の議論の前提にあったのはN.Lohfinkである。彼は1990年代初頭に、表記した問題を考察している[10)]。Lohfinkは、詩編24編で提示された入城の条件にかなった者が25–26編の詩人であると言う。すなわち、詩編24編でヤハウェの山に登ることを許可された人は、「手が潔白で、その魂を空しいものに上げない」（4節）と語られている。それに対して詩人は、詩編25編1節で「あなた（ヤハウェ）に、わたしの魂を上げます」と、26編6節では「潔白の中で手を洗う」と同じ語彙を用いて応答しているからである。

ただし彼の指摘するところでは、詩編24編と25編よりも25編と26編とのつながりの方がより密接である。前者は、1）上述した「魂」をめぐる言表（24：4，25：1）、2）ヤハウェに受容される者に関する「誰が……か（*mj*）」という問い（24：3，25：12）、3）貧者の信仰（Armenfrömmigkeit）に関わる語彙（24：5，25：9，12，14，16）であるのに対して、後者は、1）ヤハウェの行う正義（25：9，26：1）、2）ヤハウェの慈しみと真実（25：5－6，10，26：3）、3）ヤハウェの憐れみとあがない（25：16，22，26：11）、4）詩人の全きさと真っ直ぐさ（*tm, jšr*＝25：21，26：1，11）、5）詩人のヤハウェに対する信頼（25：2，26：1）、6）確かな立脚点に対する詩人の期待（25：15，26：12）などである。このように、前者よりも後者の関係の方に、量的にも内容的にも多くの一致点が見いだされる。したがって、詩編24編と25編との連関性は、決して密とは言えない。

加えて、この段階でLohfinkは、そのことをもって詩編が単なる作品の収集体ではない、編集体であることを立証しようとしたのであって、必ずしも詩編24–26編が小詩集であることを示そうとしたのではなかった。その証拠に、Lohfinkは詩編25–34編を統一体とする見解を発表している。彼は詩編25編の語彙を検討し、その結果を手がかりとして旧約詩編中に類縁作品を求め、そこから詩編25–34編の集合のキアスムス構造を想定したのである。

彼は、L.Ruppertが詩編25編を37編に依拠した作品と結論づけたことの検証から作業を始める。Ruppertはその根拠として、二つの詩編が共通する言い回しを三種（ヤハウェを待ち望む、地を受け嗣ぐ、ヤハウェに逃れる）、対句を一種（全きさと真っ直ぐさ）、単語を五種（種、信頼する、恥じる、へりくだる、道）、表現を一種（敵）あげた。しかしLohfinkは、各用例の分布具合を観察し、それによってどちらが優位に立つとはいえず、また他に共通表現等をもつ作品を探求すべきであると述べる。そこで彼は詩編25編を、34編および86編とも比較する。詩編34編は同じアルファベット歌であるゆえに、86編はRuppert自身が25編と「形態的、内容的に」類似すると判断したからである。その上で詩編25編の語彙を以下に示すような七つの語群に分類し、その使用個所を書き並べた。

1）道と認識（*drk, 'rḥ, jd'*＝hi, *lmd*＝pi, *jrh*＝hi）13回：4–12節

2）契約と法（*brjt, 'dwt, 'dh, mšpt, twrh, jśr'l*）5回：9–10，14，22節

3）罪と赦し（*ḥt', pš', 'wn, slḥ*）6回：7，11，18節

4）敵と救い（*'wjb, bwš, ḥms, sṛh, bgd, ršt, pdh, nsl, jš'*）16回：2－3，14，17，19–22節

5）貧困と敬虔（*'nh, 'ml, jḥjd, jr', jrš*）8回：9，12–14，16，18節

6）信頼と希望（*ḥsh, bṭḥ, qwh*）５回：2－3，5，20-21節

7）神の特性と行為（*ḥnn, ḥsd, rḥmjm, šm, 'mt, šmr, nṣr, zkr, jšr*）15回：5－7，10，16，20-21節

Lohfinkがこれらの中から４語群以上を含む詩編を調べたところ、69作品が数えられた。次に彼は、たとえば*šmr*（守る）の主語が「神」であるかどうか、あるいは*drk*（道）が単なる「道」か、それとも「神の教え」を意味しているか否かなど用例を検討して、それらを29作品に絞る（詩９－10編は１作品とする）。使用語群数７が１、６が６、５が９、４が13である。彼が、６語群使用作品を観察すると、すべてに語群４）－７）、すなわち４カテゴリーの使用が共通していた。それゆえ彼は、これら４語群をより重要な要素と考え、残り22作品のうちから語群４）－７）の使用が共通している12作品を選び出し、これらを語彙の上で詩編25編の類縁作品と結論づけた。それらは詩編９／10，18，22，31，34，37，40，44，69，86，112，130編である。さらに語群５）、すなわち「貧困と敬虔」の語彙が欠落するが、語群４），６），７）を用いた作品を６つ指摘する（詩７，17，27，32，71，143編）。これらのうち詩編７編以外はすべて語群１）「道と認識」の語彙を含んでいる。そこでLohfinkは次のように考えた。ここにあげる作品は類型としてはいずれも嘆きか感謝であり、様式史的により初期の段階に属する。その成立年代における語群１）は、後代の語群５）の機能を有していた。神による教えや道の指示についての願いもまた、聖所における神託への求めと関わる嘆きと感謝のジャンルの古い要素であり得る。だからこれら６作品も旧約詩編の編集作業の結果として成立し、詩編25編の類縁作品に数えることがゆるされる。

彼は詩編25編が、Ruppertが主張するように37編とだけではなく34編とも密接な関係にあり、さらにどちらかと言うならば、詩編34編とより深く結びついていると述べる。それは詩編37編における語群１）と７）の要素が不明確だからである。そこでLohfinkは、詩編25編と34編、および詩編27編と32編が対応関係にあり、詩編25-34編が、次のようなキアスムス的統一体であることを示した。

詩25編

詩26編

詩27編

詩28編

詩29編

詩30編

詩31編

詩32編

詩33編

詩34編

しかしながら、Lohfinkの指摘する構造では、詩編25編と34編、および27編と32編の二組が語彙レベルで対応しているにすぎない。確かに彼は上に述べたように、詩編25編と26編との語彙レベルでの重なりを列挙し、上記した図式を補強しているが、それはこの図式の一部にすぎない。さらに後半の諸作品間の関連性や、詩編29編と30編、あるいは28編と31編との間に連関性がいかほどのものであるのか、十分に論じているとは言えない。それゆえ、これだけをもって詩編25-34編に彼が示すようなキアスムスが構成されていると言い張ることには困難がある。ただ、詩編27編と32編を関係づける彼の図式が、Hossfeldらの主張する詩編33編の位置づけに疑義を呈していることは記憶されるべきであろう。

HossfeldとZengerも、詩編24-26編の結束性を認めたが、しかしそれを独立した編集体とは考えなかった。彼らは、詩編24編と26編との間のより深い関連性を指摘し、それが25編によって遮断されていると述べた。確かに詩編24編と25編との内容的な関連性は薄いと言わねばならない。そこで彼らは、捕囚後の比較的早い時代までに詩編15-24編と26-32編の詩集が形成されたが、詩編25編はダビデ詩編を成立させるために、二つの小詩集を入念に結び合わせる作業の中で編纂されたと考えた。この小集合区分を根底から覆したのが、Matthias Millardである。彼はHossfeldとZengerとはまったく異なる編集体を構想した。

2.2. Matthias Millard Millardは1994年に出版した『旧約詩編の構成』で、詩編の編集史を取り扱っている。ただし彼の労作の大半は、上に紹介したHossfeldとZengerの研究が発表される前に固まっていたため、この書物で彼らとの対話は展開されていない。HossfeldとZengerが鍵語の重なりを中心に作業を進めるのに対して、彼が提唱したのは、個々の作品内ではなく、詩編集合における様式史である。この方法論上の異質性のため、両者の間に必ずしもかみ合う議論が期待できるわけではないが、ここではわれわれの立場を整理するために、Millardの成果を瞥見しておきたいと考える。

Millardはまず、W.Zimmerliが双子詩編（Zwillingepsalmen）[13]と名づけた詩編111-112編や105-106編、127-128編、20-21編、あるいは、表題から一定のまとまりをもって伝承されたと思われるハレルヤ集（詩113-118、146-150編）、都もうでの歌（詩120-134編）、コラ詩編（詩42／43-49、84-85、87-88編）、アサフ詩編（詩73-83編）などの小集合を検証する。その中で彼は考察の焦点を、個々の作品の様式史ではなく、小集合についてのマクロな様式史に絞ってゆく。個々の作品における様式史という場合、たとえば個人の嘆きの歌についてC.Westermannは、a. 神への訴え、b. 嘆き、c. 信仰の告白、d. 祈願、e. 頌えの誓い、と続く図式を指摘した[14]。しかしMillardは、純粋な（嘆きの歌の）様式が元来は存在していたとする前提の中で行われる様式史的な研究は、文献批判の「補助手段」にすぎないと批判し（S. 49）、より大きな文脈における様式史を構想したのである。そこで彼はコラ詩編や都もうでの歌など巡礼歌を含む集合、嘆きを中心とする集合であるアサフ詩編、および小作品群を並べた集合である第一、第二ダビデ詩編などを検証し、それらが、基本的に嘆きに始まり頌えへと移行してゆくこと、その移行面で託宣（Orakel）が役割を果たしていること、各終結部に知恵の作品が来ることを、共

通の様式として指摘した。このような嘆きから頌えと感謝へと進行し最後に締めくくりの嘆きに戻る流れを、Millard は構成の弓形（Kompositionsbogen）と呼び、旧約詩編が編集されたひな型とする。そしてこの図式はアサフの歌やコラの歌にも確認される。その具体例として第二ダビデ詩編（詩51編以下）に対する彼の分析を取り上げる。

この集合体について Millard は、ソロモンに帰された（したがってダビデ詩編から外れる）詩編72編を、C.Wetermann 以来の見解に基づき、旧約詩編編集時に割り当てられた王の詩編とする[15]。そして詩編51–64編を嘆きの歌の作品群（Cluster）と性格づける。彼は、これらのうち懺悔の歌である詩編51編が、後続作品に見られるような敵対者への明確な言及を欠落させているため、詩編50編との双子詩編であると考え、詩編52編をこの集合体の起点とする。彼は大雑把に詩編52–64編を嘆きの歌とし、詩編65–68編には讃歌と感謝が配置された、定型の様式を観察する。終結部の詩編69–71編は、この集合の冒頭に見られる嘆きに対応している[16]。その中で、終結直前の70編は、第一ダビデ詩編で同位置にある詩編40編14–18節を反復しており、二つのダビデ詩編をつなぐ機能があると言う。無表題作品である詩編71編は病気と老いのモティーフを導入しているが（9–11節）、それも第一ダビデ詩編にも見られ、彼は双方のダビデ詩編編集が深いレベルでつながっていると考えるのである（S. 115ff.）。

Millard はこの観点から、第一ダビデ詩編の構成を考察する。彼は、具体的には、P.Auffret ら[17]が指摘した詩編15–24編のキアスムス構造を原則的に早くから形成された統一体と認めた上で、これをさらに拡張しようと試みるのである。すなわち彼の見るところ、この構造の前後にある14編と25編は知恵的な嘆きという点で、また11–13編と26–28編もそれぞれ嘆きの歌ということで対応関係にある（S. 24ff.）。そして讃歌と感謝を記す29–31編がこのキアスムス構造の終結部を構成する。さらにそれに続く詩編32–41編が第一ダビデ詩編全体の終結部となる。後に触れるが、このまとまりにも、部分的に変形されているものの、定型の様式が見られる。またこのキアスムス構造よりも前に置かれた詩編１–10編にも、以下に述べるような、構成の弓形が観察されるという。

詩編１–２編はたいてい旧約詩編全体の表題と解される知恵的な序文であるが、彼は Gunkel や Kraus を引用して、これが正典全体に結びつけられていると述べる。それは１編２節「ヤハウェのトーラーを、想う、昼も夜も」が律法の書の存在を前提としており、かつ預言書の冒頭と結尾（ヨシ１：7–8「トーラーを……あなたは想う、昼も夜も」、マラ３：22「モーセのトーラーを覚えよ」）にも反映しているからである。また詩編２編７節「わたしの子だ、おまえは」は、やはりサムエル記下７章13節以下をエコーしている。このように、旧約全体を意識した記述となっている旧約詩編劈頭の二作品は、徐々にサムエル記に重心を移していっている。

続く詩編３–７編が構成の弓形の核となる嘆きの部分である。Millard はそれを枠づける３編と７編の表題がサムエル記から採られていることを指摘する。すなわち、詩編３編の表題は明らかにサムエル記下15章の「アブサロムの謀反」を前提としている。７編の表題に直截サムエル記の伝承を示唆する要素はないが、彼は、その中で言及される「クシュ」が固有名詞ではなく、サムエル記下18章21節以下に登場する「クシュ人」を指すと考える。そこで Millard は、

詩編3－7編をアブサロム物語に関係づけて読む。詩編3－6編は「夜」もしくは「朝」を舞台としているが（3：6，4：9，5：4，6：7）、それはダビデがアブサロムとの闘いについて熟慮した時間を暗示する（サム下17章）。7編にそのような時に関わる表示がないのは、ダビデが勝利を収めたからと説明する。終結に見られる嘆きを突き抜けた頌え（18節）はその証である。それに続いて詩編8編の讃歌と9－10編の感謝の歌が導入される。このようにして、嘆きから讃歌、感謝へと至る構成の弓形が完成するというのである。彼はさらに9編表題の*'l-mwt*が、しばしば本文批判によって*'l-'lmwt*（「女声による」、「アラモト調で」など）と読み替えられることを批判し、これを「（アブサロムの）死（*mwt*）について」と直訳する。そうして、詩編3－7編と9－10編とが関係づけられる。さらに、無表題の詩編2編と10編とがともに「なぜ（*lmh*）」に始まること、外枠の1－2編と9－10編がいずれも知恵の作品であることをあげ、詩編1－10編が知恵の詩編に始まり、嘆きを経て讃歌と（知恵的な）感謝が配置される一つの編集体であることを示す。

第一ダビデ詩編の中核をなすのは、上述したように、詩編19編を囲むキアスムスである。Mil*lard* は、1－10編において祭儀や神殿、あるいはシオンへの想いが高められていることを指摘し、それをエルサレムへの途上で用いる巡礼歌と、対して詩編11編以下、とりわけ15編以下を、エルサレムにおける入城の典礼を模倣、もしくは改訂した作品集と想定する（S. 136）。彼の理解では、詩編15編は一般的な入城の心構えを語り、具体的に神殿の「門」に言及する24編はエルサレム到着後の入城の典礼である。確かに詩編18編の表題はダビデのエルサレム帰還（到着）を暗示しているので、順を追っていると言えるかもしれない。そうして詩編30編では、ダビデによる神殿奉献の歌が歌われる。詩編31編は終結の嘆きと性格づけられるが、その締めくくりのフレーズ「雄々しかれ、ヤハウェを待ち望め」（25節）は、詩編2編と同じくヨシュア記1章7節をエコーしている。そうして、新しい段落である詩編32–41編が導入される。

Millard は、詩編32編と1編とが、冒頭の「幸いあれ」（*'šrj*＝1：1，32：1）、「昼と夜」（1：2，32：4）、「（ヤハウェの教えとしての）道を行く」（1：1，32：8）といった表現の重なりから、並行関係にあると述べる。彼はさらに、N.M.Sarna の詩編1編と41編とを対応作品とする見解をあらかじめ提示し[18]、詩編32–41編を、第一ダビデ詩編を締めくくる「知恵による構成」（weisheitliche Komposition）とする。この場合、詩編32編は知恵的な作品、33編は讃歌、そして34–39編が嘆き、40編が感謝、41編が知恵的な作品と、彼が指摘する構成の弓形の配列に比すると、部分的には鏡型に対応するものの全体としては変形している。そこで彼は、32–41編が独立した統一体ではなく、旧約詩編全体の完成に向かう文脈上にある蒐集体と考えたのである（S. 139f.）。

2.3. 中間的考察　ここまで、第一ダビデ詩編中央部に関する研究を検討してきた。Hossfeld と Zenger は、自身の構想する編集プロセスの原則から、詩編25–34編にキアスムスの構造を見いだした。Lohfink も若干異なる視点から、キアスムス構造を指摘した。Lescow は小さな集合体を、また Millard は、Hossfeld と Zenger とは異なる様式史的な図式を思い描いた。彼らに共

通するのは、各詩編間に観察される語彙、表象レベルの対応については積極的に取り上げるが、作品の連続性が生み出すメッセージに対して必ずしも十分な照明をあてているとは思えない点である。すなわち、Hossfeld と Zenger や Millard らは、前提とする理念的な図式を活かそうとするあまり、牽強付会の感を免れないかたちで、作品を関係づけた。

たとえば Hossfeld と Zenger の場合、詩編33編が最終編集段階に挿入されたことは認められるとしても、それが32編と34編との間に置かれるべき理由は判然としない。Lohfink の想定するキアスムス構造は、語群レベルで詩編27編と32編が対応するというのだが、Hossfeld と Zenger が指摘したような26–28編と32–30編との間に見られる語彙レベルにおける対応の方が説得的であるように思われる。また Millard についても同様に、31編と32編を区切る根拠が、彼の様式史的な図式の上ではともかくも、内容的な連続という点では明確とは言えない。両作品の間には病のモティーフや罪の語彙が共通し、連続性を推察できる。

われわれの考えるところ、詩編24編と25編との間には、中間休止が認められてよい。また、Hossfeld と Zenger および Lohfink らが指摘するように、詩編25編と34編とは対応関係にある。すなわち、両作品の間には、1.3. に示したような Hossfeld と Zenger が列挙する連関性があり、かつ Lohfink が調査した語群の重なりも観察される。それゆえ、詩編25–34編を一つの統一体見なすことが妥当であろう。さらに双方の結部（p 詩行が特別な位置を与えられている）に次のような「進展」[19]が見られることも記憶されるべきである。

25：22　あがなってください（*pdh*）、神よ、イスラエルを、その苦悩のすべてから。

34：23　ヤハウェは、彼のしもべたちの魂を、あがなう（*pdh*）。

25編終結の願いは、34編で応えられている。加えて25編では対象が「イスラエル」であるのに、34編では「彼のしもべたち」と、対象の限定が取り払われ、拡張されている。これは直前の詩編構成体（詩15–24編）にも見られた現象であり、旧約詩編編集の特性に数えられる要素である。ではそのような変化は、いかにして生じたのであろうか。

N.Füglister が旧約詩編のテクストを「祈りと思索の書」と主張した背景には、死海文書における詩編写本との相違から推察された配列の問題があった。彼は旧約詩編に、連作的な性格を見て取ったのである。したがってこの方法論に立つならば、より重要なのはキアスムス的な対応ではなく、隣接作品間の関連性、あるいは配列の意図性である。筆者は以前に文芸学的な方法が、1）伝承本文の尊重、2）内在批評の優先、3）テクスト全体を対象とするという三点を原則とし、その観点に立つ研究の指標に、モティーフや意識の「移行」(Übergang) を指摘した[20]。再三述べてきたように、Hossfeld と Zenger あるいは Millard らの研究に欠落しているのは、この「移行」という視点である[21]。以下に今後われわれの理解する詩編25–34編編集の意図性を考察する上で課題となる事柄を列挙しておく。

3．連作としての詩編25-34編――考察のポイント

上述したように、われわれはテーマの移行を観察する中で、この小集合の強調点を浮き上がらせたい。では何を観察の対象とするべきであろうか。詩編25編が考察の対象である小集合劈頭の作品となる。先行する小集合（詩15-24編）においてもそうであったように、基本的には序言にあたるこの作品で集合全体に関わる問題が提起されていると考えてよい。そこで詩編25編を分析する中で、そのテーマの抽出を試みることとする。

1）作品冒頭の第1節「あなたに、わたしの魂を、わたしは上げる（*nś'*）」は、詩編24編4節「魂を、むなしいものに上げない（*nṣ'*）」の語法を模し、その内容を展開させていると見ることができる。これが先行する集合との連続性を創出する。であるならば、この詩編の主に前半に頻出する「道」の語彙が（*drk*＝6回、*'rḥ*＝2回）、詩編24編に触れられた、ヤハウェの聖所に至る道を暗示すると考えられる。したがってわれわれは、先行作品から継承したテーマとして神殿の問題を取り上げる必要がある。

2）この詩編は以下のようなキアスムス構造を示している[21]。

a　祭儀的呼びかけ（1節）
b　敵と恥からの救済嘆願と希望の所在の確認（2－3節）
c　道の教示による罪の赦しの請願と現状の告白（4－7節）
d　道の教示者なるヤハウェへの信仰の表白（8－10節）
e　罪の赦しの確信（11節）
d′　道の教示者なるヤハウェへの信仰の表白（12-15節）
c′　罪の赦しの請願と現状の告白（16-18節）
b′　敵と恥からの救済嘆願と希望の所在の確認（19-21節）
a′　祭儀的集結部（22節）

この構造においてヤハウェは、a-cでは二人称、dでは三人称、eでは二人称で描かれている。これとは別のキアスムス構造も提案されているが、いま述べたヤハウェ表現の形式をも視野に納め、われわれはRuppertらとともに、上記した分析が妥当であると考える。さて、この詩編は11節の「罪の赦し」を中心に創作されている。その前提となるのが、cで述べられる罪の告白である。このテクストには罪の語彙がいくつか見られるが（*ḥṭ't, ḥṭ', pš', 'wn*）、文脈の上からは、それらの担い手が詩人自身であると解せる。詩人は16-18節で自身を「貧しい者」と呼んでいる。詩人の人物像をどのように特定するかは、解釈の重要な鍵となる。われわれは先行作品で、詩人が異邦人であると想定させられる表現に遭遇し、文脈設定の手がかりとした。旧約詩編において、敵を罪人として糾弾するテクストは少なくない。その意味でこの言表は、われわれの小集合を特徴づけるものと言える。それゆえ、罪の担い手と詩人の同定の問題が問われるべきであろう。また合わせて、敵対者の扱いや救済の対象の問題が浮上してくることになろう。敵対者を考察することは、詩人がいかなる人物を仲間と見ているかに通じ、人物像を

絞る手がかりとなるからである。

3）第三のテーマは、21節「全きさと真っ直ぐさが、わたしを守ってくれますように」の解釈に関わる。すなわち、「全きさと真っ直ぐさ」(*tm-wjšr*) が誰に属するそれであるか（神か、詩人か）という問題である。これについては、すでにいくつかの注解書が取り上げている。基本的にこれら二つの語は人間にあてられる語である。ただ jsr が直前の８節で神について用いられていたため、このような疑問が湧いたのである。P.C.Craigie は、この連辞が11節の告白から考えて詩人の徳ではあり得ず、列王記上９章４節でダビデにあてられていることを考慮して、詩人の悔改と神に従う決意を述べているという[22]。しかし詩編26編では、これらの二語は明らかに、悔改に基づくへりくだりと言うよりも、裁判における詩人自身の正当性を論証する材料として用いられている。するとここからは、正当な者が神から報償としての救いを獲得するという、行為義認論的な応報思想の響きを聞き取ることができうる。このモティーフがどのように移行するかに着目することが枢要である。

注

1）N.Füglister, Die Verwendung und das Verständnis der Psalmen und des Psalters um die Zeitwende, in : J.Schreiner (Hrsg.), *Beiträge zur Psalmenforschung. Psalm 2 und 22*, S.319–384, 1988, S. 380 ; ders., Die Verwendung des Psalters zur Zeit Jesu, *BK* 47 (1992), S. 201–208 ; N. Lohfink, Der Psalter und die christliche Meditation. Die Bedeutung der Endredaktion für das Verständnis des Psalters, *BK* 47 (1992), S. 195–200 ; E. Zenger, Was wird anders bei kano-nischer Psalmenauslegung? in : F.V.Reiterer (Hrsg.), *Ein Gott eine Offenbarung* (FS. N. Füglister), 1991, S. 397–413 ; F. -L.Hossfeld-E. Zenger, *Die Psalmen I* (NEB) 1993 ; J. C. McCann (ed.), *The Shape and Shaping of the Psalter* (JSOTS 159), 1993 ; N. Whybray, *Reading the Psalms as a Book* (JSOTS 222), 1996,などを参照。邦語では、拙論「旧約詩篇の編纂と配列に関する一考察」『オリエント』35／２（1993), 22–38頁。N. ローフィンク「詩編理解にとっての最終編集の意義」WAFS 刊行会編『主のすべてにより人は生きる』1992年所収。石川立「詩編の様式と編集」木幡他編『聖書学の方法と諸問題（現代聖書講座第２巻）』日本基督教団出版局、1996年所収。

2）総論としては、注１）に記したE. Zenger, Was wird anders bei kanonischer Psalmenauslegung ? 。詩編３–14, 35–41編については、F.-L.Hossfeld-E. Zenger," Selig, wer auf die Armen achtet" (Ps 41, 2). Beobachtungen zur Gottesvolk-Theologie des ersten Davidpsalters, *JBTh* 7 (1992), S. 21–50。詩編15–24編については、dies., "Wer darf hinaufziehen zum Berg JWHWs?" Zur Redaktionseschichte und Theologie der Psalmengruppe 15–24, in : G. Braulik-W. Gros-S. McEvenue (Hrsg.), *Biblische Theologie und gesellschaftlicher Wandel* (FS. Lohfink), 1993, S. 166–182、詩編25–34編については、dies., "Vom seinem Thronsitz schaut er nieder auf alle Bewohner der Erde" (Ps 33, 14) Redaktionsgeschichte und Kompositionskritik der Psalmengruppe 25–34, in : I.Kottsieper u.a. (Hrsg.), *"Wer ist wie du, HERR, unter den Göttern?" Studien zur Theologie und Religionsgeschichte* (FS. O. Kaiser), 1994, S. 375–388。

3）拙論「統一体としての詩篇15–24篇」『神戸女学院大学論集（＝『論集』）』40／１（1993), 15–32頁、同「詩編３–14の編集と構成」『論集』44／１（1997), １–12頁、同「詩編35–41編の編集史について」『論集』45／２（1998), 47–60頁。

4）基本的に注２）に記した Hossfeld–Zenger による FS. O. Kaiser 所収の論文と注１）に記した彼らの注解書によってまとめた。本論文中で、これらからの引用は逐一注記しないこととした。

5）注２）に記した Hossfeld–Zenger の *JBTh* 7 の論文の S. 49f. を参照。さらに『論集』44／１の拙論、３–４頁を見よ。

6) その他にも、たとえば、K.Seybold, *Die Psalmen. Eine Einführung*, 1986, S. 26 を見よ。
7) N.Lohfink, Psalmengebet und Psalterredaktion, *ALW* 34 (1992), 1–22, bes. S. 20.
8) Th.Lescow, Textübergreifende Exegese. Zur Lesung von Ps. 24–26 auf redaktioneller Sinnebene, *ZAW* 107 (1995), S. 65–79.
9) Vgl. ders., *Das Stufeschema. Untersuchungen zur Struktur alttestamentlicher Texte* (BZAW 211), 1992.
10) N.Lohfink, Einige Beobachtungen zu Psalm 26, in : F. V. Reiterer (Hrsg.), *Ein Gott eine Offenbarung* (FS. N. Füglister), 1991, S. 189–204.
11) L. Ruppert, Psalm 25 und die Grenze der kultorientierten Psalmeexegese, ZAW 84 (1972), S. 576–582.
12) M.Millard, *Die Komposition des Psalters*, 1994.
13) W. Zimmerli, Zwillingspsalmen, in : J. Schreiner (Hrsg.), *Wort, Lied und Gottesspruch. Beiträge zu Psalmen und Propheten* (FS. Ziegler), 1972, S. 105–113. (=ders., *Studien zur alttestamentlichen Theologie und Prophtie. Gesammelte Aufsätze II*, 1974, S. 261–271)
14) C. Westermann, Die Rolle der Klage in der Theologie des Alten Testaments, in : ders., *Forschung am Alten Testament. Gesammlete Studien II*, 1974, S. 255.
15) M. Millard, a. a. O., S. 123. C. Westermann, Zur Sammlung des Psalters, in : ders., *Forschung am Alten Testament. Gesammlete Studien*, 1964, S. 336–343.
16) 彼の研究内容を筆者の関心から観察すると、56編13節や61編６，９節には感謝や讃美のモティーフがある。Millard 自身は指摘していないが、その直前、詩編55編23節と60編８節以下には託宣がある。嘆きに始まり託宣、頌え、感謝と続く流れを構成体の基本様式とする彼の観点から整理するならば、詩編52–56編と57–61編を小詩集と見なすことも可能かもしれない。だが表題に基づくならば、詩編52–55編はマスキール、56–60編はミクタムであり、齟齬を来すことになる。ここではそれについてさらなる議論はせず指摘にとどめるが、事柄は Millard が想定する以上に複雑である。
17) P. Auffret, *La Sagesse a bâti sa maison* (OBO 49), 1982, S. 410. E. Zenger, 注１）に記した Was wird anders……。注３）に記した『論集』40／１の拙論等を参照。
18) N. M.Sarna, Art. Bible, *EJ* 15, pp. 1303–1322, esp. p. 1311.
19) J. Kugel が *The Idea of Biblical Poetry*, 1981の第Ⅰ部３－５節で、詩文の意味拡張機能を説明するために用いた"progression"の概念に基づく。これは、J.G.ジャンセン（拙訳)『ヨブ記』日本基督教団出版局、1989年（原著1985年）においても主要な役割を果たしている。邦訳の「訳者あとがき」を見よ。
20) 拙論「文芸学的方法――理念と応用」木幡他編『聖書学の方法と諸問題（現代聖書講座第２巻）』日本基督教団出版局、1996年所収。特に55–58頁。
21) 拙論「コラ詩編（詩42／43–49編）の構成と主題」『論集』46／２（1999), 15–26頁、23頁以下。「移行」については、H. ヴァインリヒ（脇坂他訳)『時制論』紀伊國屋書店、1982年、特にⅠ，Ⅱ，Ⅶ章、同『言語とテクスト』紀伊國屋書店、1984年、Ⅶ章「言語学における移行」を参照。旧約テクストへの応用としては、W. Schneider, *Grammatik des biblischen Hebräisch*, 1982, S. 182f. 拙論「旧約詩文テクストの構造分析」『論集』34／１（1987年)、22頁以下。同「深き淵と錯綜する神名」『論集』37／１（1990年)、118頁以下など。
22) Ruppert, a. a. O. を参照した。
23) P. C. Craigie, *Psalms 1–50* (WBC), 1983, p. 221.

※この研究にあたり、1999年度神戸女学院大学研究所助成金を受領しました。記して、謝意を表します。

（原稿受理2000年９月29日）